

まの、めのほがらくと明ゆけばおのが衣々なるぞかなしき

〔書言字考節用集二時候天明之平旦義〕

朗々同會明同萬葉鬚々同幽若々、幽並同

〔倭訓栞前編二十八保候〕ほのく　ほのかに明るる貌なり、人麻呂のほのくの詠は、晉謝靈運が詩に、

中流袂就判、欲去情不忍、願望旣未怡、汀曲舟已隱、といへる意なるべし、

〔伊勢物語上〕うちなきてあばらなるいたじきに、月のかたぶくまでふせりて、こぞを思ひ出て

よめる、略○中夜のほのくと明るるになくくと歸りにけり、

〔古今和歌集九羈旅題〕題まらず

よみ人まらず

ほのくと明石の浦のあさ霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ

この歌は、ある人のいはく、かきのもとの人丸が也、

○按ズルニ、此歌今昔物語卷二十四ニハ小野篁ノ歌トセリ、

〔饅頭屋本節用集時安節有明〕

〔書言字考節用集時二稱明又晨〕

〔倭訓栞前編二安編三〕ありあけ　有明の義、十六夜以下は夜は已に明るるに、月は猶入らで有る故にいふ

なり、或は晨明をよめり、

〔古今和歌集十三戀題〕題まらず

みぶのたゞみね

有明のつれなくみえし、別より曉ばかりうき物はなし

〔千載和歌集十七雜秋比山寺〕にて讀侍ける

藤原良清

おもふこと有明かたの鹿の音は猶山ふかく家るせよとや

〔運歩色葉集阿平旦〕

〔書言字考節用集時二朝開萬〕

朝朗同明卒同